

我が国における出生コホート研究の意義、現状、そして今後

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2016-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 臨太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2935

我が国における出生コホート研究の意義、現状、そして今後

森 臨太郎

国立成育医療研究センター 政策科学研究部

出生コホート研究の意義：受精時、胎芽期、胎児期の子宮内及び乳幼児期の望ましくない環境がエピゲノム変化を起こし、それが疾病素因となり、出生後の環境との相互作用によって多くの生活習慣病発症原因の一端となっているとされる DOHaD の考え方に関する研究アプローチは、基礎医学的研究技法を用いてエピゲノム変化を検証するものと、社会医学的研究技法を用いて出生前後より母子を登録し長期的に観察することで検証するものが多い。現在、こういった基礎医学的アプローチと社会医学的アプローチが一緒になって行う研究が増えており、分野横断的なアプローチが必要とされている。いずれにせよ、長期にわたる関係性の証明にはコホート研究が必須であり、本分野の研究においては出生コホート研究を行うことが必須である。我が国は生活習慣病の罹患率、食習慣を含めた生活習慣、肥満ややせの頻度、メンタルヘルスなど、先行研究が多く生まれてきた北米欧州と異なる特徴があり、そういった意味でも、我が国において出生コホート研究があることは、グローバルレベルでの科学的根拠に貢献するだけでなく、我が国において今後介入や政策、対策を考える意味では、必須であると考えられる。

出生コホート研究の現状：多くの研究にはさまざまな限界があり、特に長期の疾病の因果関係の証明は研究上大変困難であることもあり、DOHaD の関連研究も一般的にエビデンスレベルが低く、DOHaD の仮説に懐疑的な考え方が多い理由の一端となっている。我が国においては、シンポジウムで各研究者が発表するような先行的な事例はあるものの、一般的には小規模なものが多く、また代表性にかけ、質の高い出生コホート研究は少ないという傾向がある。また、関係性については濃厚になっているものの、具体的な政策に結びついていないという現状もある。

出生コホート研究の今後：こういった現状を踏まえると、以下のようなことが望まれており、かつ研究として盛んになると考えられる。

- 1) 個人レベルや集団レベルでの介入や政策研究により、実際に健康指標を改善する研究が行われ、政策あるいは診療や保健活動の現場で、導入されていくこと
 - 2) レコードリンケージ手法や遺伝疫学のように、それぞれの研究をメタレベルで統合し、代表性やサンプルサイズ、変数の質が向上されていくこと
 - 3) 診療や保健活動現場の記録が電子化され、研究利用が可能になる、あるいはより利用されやすくなるにつれ、こういった二次データを利用した研究が盛んになること
- こういった新しいアプローチを可能にするためには、当学会のように研究者同士のコミュニケーションや協働が重要な役割を果たすと考えられる。